

II 平成28年度 埼玉県がん教育指導者研修会

文部科学省委託事業「がんの教育総合支援事業」

平成28年度 埼玉県がん教育指導者研修会開催要項

1 趣 旨

日本人の死亡原因として最も多いがんについて、がんそのものの理解やがん患者に対する正しい認識を深める教育は不十分であり課題であると指摘されている。

この課題解決のためには、学校教育を通じてがんについて学ぶことにより、健康に対する関心を持ち、正しく理解し、適切な態度や行動をとることができるようにすることが必要である。

学校におけるがんに関する指導の充実を図るため、その必要性を十分理解し、学習指導の実践研究、普及啓発が行われるよう研修会を開催する。

2 開催日時 平成28年7月25日（月） 13:30から16:30まで
(13:10から受付)

3 会 場 北本市文化センター
〒364-0033 北本市本町1-2-1

4 主 催 埼玉県教育委員会

5 参加対象者

- (1) 公立小・中・高・特別支援学校の教職員
- (2) 市町村教育委員会の指導主事 等

6 日 程

13:10	13:30	13:35	14:00	14:30	14:45	16:15	16:30
受	開	行政説明	実践事例発表	休憩	講演	質疑	閉
付	会	25分	30分		90分	応	会
	行					答	行
	事						事

7 内 容

- (1) 行政説明
・ 県教育局県立学校部保健体育課 指導主事
- (2) 実践事例発表
・ 中学校指導事例 第3学年 保健体育（保健分野）
「健康な生活と疾病の予防」 イ 生活行動・生活習慣と健康
蕨市立第二中学校 咲間 悟 主幹教諭
- (3) 講演
「学校におけるがん教育の在り方について」
・ 講 師 聖心女子大学 文学部教育学科 教授
博士（医学） 植田 誠治 氏

1. なぜいま「がん教育」なのか

がんは、日本において1981年より死因の第1位である。年間30万人以上ががんで亡くなっており、これは全死亡の約3割に相当する。また、生涯でがんに罹患するリスクは年々増加し、最近では男性が60%、女性が45%と推計されており、日本人のおよそ2人に1人が一生のうちにがんと診断されるということになる。

その一方で、がんに対する関心の低さや誤った認識も指摘されている。そして、そのことが必要以上の不安を引き起こしたり、検診率の低さを齎したり、がん患者あるいはその家族への差別や偏見を持つことにつながることも指摘されている。

また、国のがん対策を進めるために2012年6月に閣議決定された第2期「がん対策推進基本計画」では、がん教育の必要性が指摘され、「子どもに対しては、健康と命の大切さについて学び、自ら健康を適切に管理し、がんに対する正しい知識とがん患者に対する正しい認識を持つよう教育することを目指し、5年以内に、学校での教育のあり方を含め、健康教育全体の中でがん教育をどのようにすべきか検討し、検討結果に基づく教育活動の実施を目標とする。」ことが示されている。

2. 国民の教養としての学校におけるがん教育の目標

「がん対策推進基本計画」を受けて、文部科学省が公益財団法人日本学校保健会に「がんの教育に関する検討委員会」を設置、そこでは学校におけるがん教育の枠組みがまとめられている¹⁾。学校におけるがん教育について多面的な検討を行い、学校におけるがん教育の目標を次のように示している。

1) がんに関して正しく理解できるようにする・・・がんが身近な病気であることや、がんの予防、早期発見・検診について関心を持ち、正しい知識を身に付け、適切な対処について理解できるようにする。

2) いのちの大切さについて考える態度を育成する・・・がんについて学ぶことや、がんと向き合う人々を通じて、自他のいのちの大切さを知り、自己のあり方や生き方を考える態度を育成する。

このように学校におけるがん教育の目標をがんに関する理解と命の大切さを考える態度とすることに異論はない。ただし、児童生徒には、がんに対する不安が認められること²⁾、そして小児がんの子どもたちへの教師の理解や友達の励ましが大きな支えになる一方で不用意な言葉や態度がいじめや差別にもつながること³⁾などを踏まえて、筆者は、それらを払拭することを、あえて明確に示しながら、次のような目標を持つことが必要ではないかと考えている。

「学校におけるがん教育の目標は、がんの疾病概念、予防方法、検診の意義を正しく理解し、がんを予防する能力や態度を高め、がんに対するいたずらな不安や偏見を払拭する。また、人間尊重の精神（やソーシャルインクルージョンの考え方）に基づき、がんやがんと向き合う人々について学ぶことによって、自他の健康といのちの大切さを知るとともに自己のあり方や生き方を考える態度を育成する。」

3. 学校における健康教育の特徴

学校における健康教育は、児童生徒が生涯を通じて健康な生活を送るうえでの基礎を培かうものである。その観点から、学校における健康教育では、健康を自ら保持増進するために必要な能力・態度を育成する。「生涯を通じて健康な生活を送るうえでの基礎を培かう」という観点は、まさに発育発達途上にある児童生徒を対象とする学校における健康教育の特徴といえる。学校という「場」の概念で健康教育を考えるのではなく、発育発達途上にある児童生徒を教育するという「機能」の概念で健康教育を考えるという特徴である。

筆者は、そのような特徴を有する学校における健康教育に、がんに関する学習内容をこれまで以上に位置付けていこうとすることに大きな価値と可能性を感じている。その価値と可能性を確固たるものとするうえで、次のことがらを押えておくべきであろう。

4. 教育課程の特性とがん教育

教育課程上の健康教育の位置付けをまず確認しておきたい。学校における健康教育は、小学校においては体育科（保健領域）、中学校においては保健体育科（保健分野）、高等学校においては保健体育科（科目保健）を中心として、また特別活動や総合的な学習の時間、道徳、その他関連する教科をも通じて、計画的に行われる。

そして、児童生徒が学習する内容は学習指導要領ならびにその解説によって定められたり例示されたりする。小学校体育科（保健領域）、中学校保健体育科（保健分野）、高等学校保健体育科（科目保健）では保健教科書が使われるが、教科書の内容もこの学習指導要領と解説に準じるものとなっている。もちろん、地域や学校の特性、児童生徒の発達や特性等を考慮して各学校の教育課程は編成されることや、実際の授業は教師の裁量によることも大きく、児童生徒が実際に学習する内容は柔軟なものとなる。さらに近年では、保健教科書には学習指導要領とその解説に示されたものを越える発展的内容が盛り込まれることも少なくない。この学習指導要領とその解説あるいは例示は、児童生徒の学習の実現状況の調査や今後の教育のあり方の議論などを踏まえたうえで、約10年ごとに改訂される。このような教育課程の特性を踏まえつつ、がん教育をどこに位置付けていくかを考える必要がある。

2に示した「がんの教育に関する検討委員会」のがん教育の目標を現行の教育課程に照らして考えると、1) がんに関して正しく理解できるようにする、は保健学習と特別活動の時間が中心となり、2) いのちの大切さについて考える態度を育成する、は特別活動や道徳の時間が中心となるように思われる。また、場合によって、がんについて学際的かつ主体的に学ぶ活動を、総合的な学習の時間を積極的に使って行うことも考えられる。

5. がんに関する学習内容の位置付け

現行の学習指導要領やその解説あるいは保健教科書などにおいて、がんに関する内容はすでに扱われている。例えば、現行の学習指導要領とその解説において直接的に「がん」に関する内容が明示されているのは次の部分である。

小学校体育科（保健領域）では、第6学年の「病気の予防」において、喫煙と肺がんが示され⁴⁾、

保健教科書では病気の一つとしてがんが例示されその特徴が示されたりするようになってきている⁵⁾。中学校保健体育科（保健分野）では、第3学年の「健康な生活と疾病の予防」で喫煙とがんが⁶⁾、高等学校保健体育科（科目保健）では、(1)「現代社会と健康」「健康の保持増進と疾病の予防」の中で、悪性新生物などの病気を適宜取り上げ、それらが日常の生活行動と深い関係があることが示されている⁷⁾。高等学校の保健教科書では、がんの症状とともに発病の予防と早期発見・早期治療についての内容が示されたりしている⁸⁾。

さらにがんに関してだけを取り扱うわけでないが、中学校保健体育科（保健分野）では、個人の健康を守る社会の取組として健康診断などの地域の保健活動が⁹⁾、高等学校保健体育科（科目保健）では、(2)「生涯を通じる健康」「保健・医療制度及び地域の保健・医療機関」の中で、検診の必要性、医療機関及び保健・医療サービスなどの活用の必要性が示されている¹⁰⁾。加えて、高等学校保健体育科（科目保健）(1)「現代社会と健康」「健康の考え方」で国民の健康水準と疾病構造の変化が示され、そこでは疫学的内容、生活の質や共生が示されている¹¹⁾。

また特別活動については、小学校中学校高等学校で表現が一部異なるものの、ほぼ同様に「望ましい集団活動を通して、心身の調和のとれた発達と個性の伸長を図り、集団の一員としてよりよい生活や人間関係を築こうとする自主的、実践的な態度を育てるとともに、自己の生き方についての考えを深め、自己を生かす能力を養う。」ことが目標として示され、内容の一つとして「心身ともに健康で安全な生活態度の形成」「生命の尊重と安全な生活態度や規律ある習慣の確立」などが示されている¹²⁻¹⁴⁾。

道徳においては、「人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を家庭、学校、その他社会における具体的な生活の中に生かし、豊かな心を持ち、・・・中略・・・その基盤としての道徳性を養うこと」が目標として示され、「望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする」ことや「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」ことなどが示されている^{15,16)}。

一方、「がんの教育に関する検討委員会」では、学校におけるがん教育の学習内容について次の8つが示されている。

- 1) がんとは（発生要因）
- 2) 疫学
- 3) 予防
- 4) 早期発見・検診
- 5) 治療（手術、放射線、抗がん剤）
- 6) 緩和ケア
- 7) 生活の質
- 8) 共生

ここに示されたものを現行の教育課程に当てはめて考えるならば、1)～4)の学習内容は、小学校体育科（保健領域）、中学校保健体育科（保健分野）、高等学校保健体育科（科目保健）で中心的に扱われる。5)、6)は、高等学校保健体育科（科目保健）で扱わないわけでないが限定的である。これらを行うとすれば特別活動や総合的な学習の時間などでの扱いが中心といえる。また、7)8)については、高等学校保健体育科（科目保健）で一部扱うとともに、小学校から高等学校までの特別活動や小学校中学校の道徳、場合によって小学校から高等学校までの総合的な学習の時間での扱いということになるであろう。

誰が実際に授業を担当するのかという指導者の問題をも照らしあわせて授業の充実を考えるならば、

1)～4)の内容については、教師が中心となり、小学校体育科(保健領域)、中学校保健体育科(保健分野)、高等学校保健体育科(科目保健)での充実をはかり、5)6)について、その基本的な内容については教師が中学校保健体育科(保健分野)、高等学校保健体育科(科目保健)で行う事を積極的に検討し、5)6)の実際や最新情報などは、特別活動で医療関係者など外部講師の積極的活用によって充実させること、7)8)については、高等学校保健体育科(科目保健)で教師が行い、小学校中学校では、道徳の時間、また小学校から高等学校までの特別活動を用い、モデル教材の開発とともに、教師に加えて医療関係者やがん経験者といった外部講師の積極的活用によって充実させることができると思われる。

6. がんに関する学習内容の位置付けの課題

しかし、現行の小学校体育科(保健領域)、中学校保健体育科(保健分野)、高等学校保健体育科(科目保健)では、がんと生活行動との関係が取り扱われるものの、がんが多様な原因によって起こることやそれをふまえての予防方法の理解を促すには十分となっていない。筆者らが行った高校生のがんの原因についての認識調査の結果では¹⁷⁾、がんの原因について「たばこ」を回答する者は男女とも94.4%と高いものの、「食事に関するもの」、「運動不足」、「細菌・ウイルス」などについては2～3割程度しか回答できておらず、逆に間違いである「魚や肉の焼けこげ」は4割以上がそれを原因として回答していた。

検診について、高校生に調査したところ¹⁸⁾、「がん検診はどのような人が受けるものだと思うか」に対して「健康な人」を選択した者や「がん検診を受けられるようになったら、あなたは検診を受けようと思いますか」に対して「受けようと思う」を選択した者は、いずれも7割程度にとどまっている。

一方で、先にも示したようにがんに対して、怖いという意識は高く、まずがんの基礎的・基本的な理解を促し、がんについて十分な知識を持たずに怖がることを払拭していくことが求められる。そのためには、がんを生活行動との関係だけでなく、がんを現代の重要な健康課題として特化し、一定のまとまりとして指導していくことが必要であろう。

また「がん教育」はがんを学ぶだけではなく、がんを学ぶことを通して保健の基本的な概念を習得する可能性が指摘できる。がんを通して、予防とは何か、健康づくりの上での一次予防と早期発見・検診の必要性和意義、病気の基本的な治療方法、そして病気からの回復や健康と生活の質との関係など、保健の基本的な概念を思考・判断したり、知識・理解を深めたりすることができるような示し方が求められる。がんを保健の基本的な概念を習得する典型教材として位置付ける発想である。

さらに特別活動の「生命の尊重と安全な生活態度や規律ある習慣の確立」や道徳の「生命の尊さを理解し、かけがえのない自他の生命を尊重する」は、がん教育の2つめの目標を達成するにふさわしい内容であり、教材開発や授業モデルの開発が必要である。

7. 学校におけるがん教育を進めるうえで配慮すべきこと

学校におけるがん教育の実施にあたっては、小児がんの当事者や小児がんの既往のある児童生徒がクラスにいる場合、家族にがん患者がいる児童生徒、家族をがんで亡くした生徒がいる場合、クラスにがん患者やがんの既往のある児童生徒がいる場合、生活習慣が主な原因とならないがんがあるとい

う基本的な内容を踏まえることはもちろん、慎重な配慮が必要になる。個人情報保護の観点から、教える側がそのような情報を持っていない場合もありうる。こんにちには生涯の2人に1人ががんに罹患する時代でもあることから、まず教室や学校にはこのような児童生徒がいるという前提で授業を行うことが必要である。ただしこのことは、実は他の病気や保健内容を取り扱う場合も同じである。

小児がんの当事者あるいは小児がんの既往のある児童生徒がいる場合、情報を有する養護教諭と授業担当者が連携を図り、プライバシーに配慮しながら、児童生徒や保護者に授業内容について事前に伝える配慮が必要である。このような場合に、児童生徒や保護者がむしろ学校全体にがんについての理解が広がってほしいと前向きにとらえるという報告も聞く。学校におけるがん教育はまさにそういう広がりを目指して行われるものではあるが、がんに関する内容を、一定のまとまりとして取り扱いはじめる過渡期には慎重な対応が必要である。

学校におけるがん教育では、がんの専門性の高さに鑑みて、広く専門機関等との連携を進める必要性が強調されている。地域や学校の実情に応じて、学校医をはじめとする医師や看護師、保健師等の保健医療専門家やがん経験者やがん経験者団体などの外部講師等の参画・協力の推進である。

すでに述べたが、がんの治療、緩和ケアの内容では、特別活動の時間を中心に保健医療専門家の参画・協力が推進されるとよい。また、特別活動や道徳の時間にがん経験者やがん経験者団体などの参画・協力は、児童生徒にとって貴重な学習の機会となるだろう。学校は、年間計画をたて教育課程を展開する。保健医療専門家やがん経験者などが授業に参画・協力していく際には、今回整理した学校における教育課程の特徴を踏まえることはもちろん、がんに関する内容がどこまで授業で学ばれているのかを把握することや学校が年間計画をたてる段階から参画していくことが必要である。

注：本論は、植田誠治「がん教育－教育の立場から（特集：子どもへのがん教育）」公衆衛生 80(2)：91－96, 2016 に基づくものである。

文献・URL

- 1) 公益財団法人日本学校保健会：「がんの教育に関する検討委員会」報告書，<http://www.gakkohoken.jp/modules/books/index.php?fct=photo&p=152>, 2014
- 2) 植田誠治，他：日本の児童生徒のがんについての意識の実態．学校保健研究 56(3)：185－198, 2014
- 3) 中川原章：小児がんとこどものがん教育．UICC 世界対がんデー2015 公開シンポジウム「小学生のがん教育を考える」抄録集：14－15, 2015
- 4) 文部科学省：小学校学習指導要領解説 体育編，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1234931_010.pdf, 82, 2008
- 5) 森昭三，他：小学校体育教科書 新・みんなの保健5・6年，36, 40, 学研教育みらい，2015
- 6) 文部科学省：中学校学習指導要領解説 保健体育編，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/21/1234912_009.pdf, 157, 2008
- 7) 文部科学省：高等学校学習指導要領解説 保健体育編，http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/19/1282000_7.pdf, 107, 2009

- 8) 和唐正勝, 他: 高等学校保健体育科用教科書 現代高等保健体育, 16-17, 大修館書店, 2013
- 9) 前掲書 6), 158, 2008
- 10) 前掲書 7), 111, 2009
- 11) 前掲書 7), 106-107, 2009
- 12) 文部科学省: 小学校学習指導要領解説 特別活動編, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_014.pdf, 2008
- 13) 文部科学省: 中学校学習指導要領解説 特別活動編, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_014.pdf, 2008
- 14) 文部科学省: 高等学校学習指導要領解説 特別活動編, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2010/01/29/1282000_20.pdf, 2009
- 15) 文部科学省: 小学校学習指導要領解説 道徳編, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2009/06/16/1234931_011.pdf, 2008
- 16) 文部科学省: 中学校学習指導要領解説 道徳編, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/01/05/1234912_012.pdf, 2008
- 17) 物部博文, 他: 日本における児童生徒のがんの原因についての認識と情報源. 学校保健研究 56(4): 262-270, 2014
- 18) 前掲書 2)